九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ソシオドラマを通した親役割理解と自己の親子関係の振り返り

岩男，尚美
九州大学大学院人間環境学府

古賀，聡
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/2228890

出版情報：九州大学心理学研究. 18, pp.85-95, 2017-03-23. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2017, Vol.18, 85-95

ソシオドラマを通した親役割理解と自己の親子関係の振り返り

岩男　尚美　　九州大学大学院人間環境学府
古賀　　聡　　九州大学大学院人間環境学研究院

Communicating the parent-child relationship through role-playing

Naomi Iwao（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）
Satoshi Koga（*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

The purpose of this study was to clarify the communication contents that lead to college students' understanding of the parent-child relationship. I proposed three research questions that were investigated by conducting two role-playing sessions. The purpose of the sessions was to promote the awareness of being a parent. The two role-playing sessions consisted of the following themes: parent-child relationship in adolescence and childhood parent-child relationship. Throughout the two sessions, the students had different experiences. Through examination of the three questions, I found that the students understood their parent-child relationships through the role-playing experience of adolescence. On the other hand, the students understood the difficulties of the parents' role through the role-playing experience of school-age children.

Key Words: Adolescence, Parent-child relationship, Role-playing

Ⅰ．問題と目的

(1) 青年は「親」をどう捉えるのか

青年期は，子どもから大人への移行期であり，心理社会的自立の獲得は青年期における重要な発達課題の一つである。自立の獲得に伴って，親子関係は次第に変化していく。落合・佐藤（1996）は，親子関係の変容過程を，児童期の親が子を抱え込み，守るような関係の時期から，青年期の親が子を信頼し，一人の人間として対等に関わる関係の時期までの段階に分けている。このように関係性は変化するものの，子にとって関係はどの発達段階においても重要なものである。特に青年期において，青年は親と子との関係をどのように捉えるのであろうか。

青年期は，学校の仲間など家庭外からの影響が大きくなる時期であるにも関わらず，人生の価値や目標，将来に関わる決定などの長期的な問題には，両親がまだ主要な影響力を持つことが分かっている（Steinberg, 2008）。Cummings, Davies & Campbell（2006）によると，青年期においては，親が子に指示的であることは青年にとってメンタルヘルスに影響を与えないが，親からの受容や応答性などの情緒的な関係が青年の社会的適応を高めることが明らかにされている。また，島（2014）は，青年が親の養育態度をネガティブに評価していることによって，結果として社会的適応を困難にすることを指摘している。このように，青年に対して自分自身の親との関係が及ぼす影響については，これまで多くの研究がおこなわれてきた。

その一方で，青年期は，他者からの意見を取り入れることにより，自分の親との関係のみならず，「親」という役割について理解し，「親子関係」そのものについての認識を新たに確立していく時期でもあると考えられる。川瀬（2010）は，大学生の年代になると，近い将来，自分が子を持ち，親としての役割を遂行することをより明確に意識するようになると述べている。さらに大島（2014）は，青年期の親準備性という視点から，青年の養育行動に対する意識には，自らの被養育体験がそのまま影響するわけではなく，自らの価値観や，社会の多様な価値観から影響を受けるとし，そのような価値観を統合して青年自身が親像を作り出すと述べている。このように，青年期においては，自分と親との関係から発展させて，「親」役割や「親子関係」についての新たな価値観を構築していくことが求められると考えられる。しかし，このように青年期が「親」役割について理解を進めて行く時期であることは示されているが，「親」役割について考えるにあたって，青年にどのような気づきが生じるのかということについてはこれまでほとんど検討がなされていない。

(2)「親」役割の理解を促すためのアプローチ

これまでの親子関係についての研究の多くは，尺度を用いた量的な研究や，インタビューによって親との関わ

りを青年の立場から振り返るものがほとんどであった。しかし，親子関係という親と子の両者がいて初めて成立する関係について理解するには，親と子のどちらか一方についてのみ振り返るのではなく，親に対する子どもの態度や心情と，親の子に対する態度や心情の双方を振り返ることが必要であると考える。そのためには，量的な研究ではなく，体験そのものに焦点を当て，相対的な関係のなかで考察をすることが必要であると考えられる。こうした対人関係について，相対的な関係のなかで体験的な気づきを促す際に有効な手法として臨床心理学的アプローチである心理劇があると考える。「心理劇」は，「サイコドラマ」の訳語であり，J. L. Moreno によって創始された集団心理療法である。心理劇は，ウォーミングアップ，劇化，シェアリングという心理劇の３相と呼ばれるものに即して展開され，ディレクター（director），主役（protagonist），補助自我（auxiliary ego），観客（audience），舞台（stage）の５要素によって構成される。増野（1977）は，この５要素を用いて，心理劇とは，「舞台という自由で安全な世界の中で，被治療者がいろいろな状況下で演じることによって，自己実現，自己洞察を可能にするよう，補助自我や監督，それに観客が援けていく集団精神療法」であると定義している。

心理劇の重要な理論の一つに役割理論があるが，J. L. Moreno（1946）は役割を「個人が他の人やものが関連する特別な状況に反応する際の，特別な瞬間に身につける機能形式である」と定義している。Kellerman（1992）は，心理劇における行為化とは，内的活動の表現であるとしており，また，Blatner（1973）も，心理劇のなかでその人の内的世界や対象関係は行為化されるが，その行為化は構造化されているグループ体験の範囲内の行演（enact）であるので，衝動的に生じた行動が洞察へと転換されるとしている。すなわち，心理劇においては，役割体験を通して自己や他者との関係性についての洞察が促され，この洞察は，認知的な理解のみならず，行為表現による体験的な理解が得られると言える。高良（2013）は過去のある時点での体験が現在の行動に何らかの影響を及ぼしていることがあり，サイコドラマを通して過去と現在の因果関係を知ることで自己理解が深まり，他者から自分はどう見られているのか，自分は他者にどのようなメッセージを発しているのかを知ることになり，洞察からの理解を通して適切な人間関係および家族関係を学ぶとしている。

このように，心理劇を用いた洞察は，自らの内面の行為化や観劇を通して自己の在り方や過去から現在までの対人関係について体験をもとに学びなおすことができる。さらに，その体験は，過去の回想のみならず，現在の自分が実際に行為を行なった，「今，ここで」の気づきである。針塚（2003）は，「今，ここで」という現実性があるので，演者は心理劇という「半現実性」の中で「現実的体験」を経験することができるとしたうえで，この「体験的現実性」の経験こそが日常におけるその個人の体験や行動の変容を促すことになると述べている。

つまり，心理劇を通して参加者は，自らの内面の行為化や観劇などの体験を通して自己の在り方や過去から現在までの対人関係について現実的な体験をもとに理解することとなる。それゆえ，親子関係についてこれまでの先行研究のように過去を回想するのみならず，親子関係を「今，ここで」行為化することによって，より現実的な体験に即した気づきとなると考えられる。

岩男・古賀（2014）は，親子関係をテーマとした心理劇体験を通して，青年が親との関係の認知をより親密なものへの変化させることを明らかにした。また，岩男・古賀（2015）によって参加者の振り返りから，より幼い子どもを演じるときに親に対する気づきが高まる可能性があることも示されているが，明確に子ども役割の年齢を規定していないため，この結果は可能性にすぎないことや，参加者の劇中の様子を考慮していないことなどの課題が残されている。

しかしながら，前述のように，親子関係のあり方は子どもの発達段階によって変化するものである（落合・佐藤，1996；小高，2000）ため，劇で行為化される親子関係のあり方も異なる可能性が考えられる。それゆえ，子ども役割の年代を明確に規定することで，それぞれの体験を通して異なる気づきが得られること推察される。

以上より，本研究では，筆者がディレクターとして親に対する気づきを促すことを目的に実施した２回の心理劇セッションの経過を報告する。心理劇セッションは子ども役割の年齢を児童期，青年期の２つ設定し，それぞれの時期において子の自己決定のための親との話し合い場面を実施する。ただし，ここで報告する心理劇は，個人の内面を外在化するような古典的なサイコドラマではなく，普遍的な人間関係のテーマを取り扱うソシオドラマである。個人の内面を取り扱わないソシオドラマだが，普遍的な人間関係のテーマと個人のテーマとを相互に反映し，そのなかで演じられた人間関係に個人を投映させて人間関係を理解を深める（古川，2015）とされている。本研究では，自分自身の親についての理解と「親子関係」自体についての理解について検討するためにソシオドラマを用いることとした。

(3) 問題の設定

これらを踏まえ，本研究では３つのリサーチクエスチョンをたて，検討を進める。第１のリサーチクエスチョンは，「児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，青年期の親子関係をテーマとしたセッションに比べ，親に対する気づきが高まるのではない

か？」として，2セッションにおける参加者の気づきを比較する。第2のリサーチクエスチョンとしては，「児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，親が子を守るような関係が行為化され，青年期のセッションでは親が子を信頼するような関係が行為化されるのではないか？」として，劇場面における参加者の行為を比較する。第3のリサーチクエスチョンとしては「個人の内面を外在化しないソシオドラマにおいても，個人の内面についての理解が得られるのではないか？」ということである。この3つの問いに答えるために，2つの心理劇セッションを報告する。

Ⅱ．研究対象のグループについて

(1) グループの構造

①メンバー：A大学の心理劇体験の講義を受講した大学2年生から大学4年生までの32名の大学生のうち，筆者がグループのディレクターを担当したグループに所属した8名（男性2名，女性6名，平均年齢22.5歳，*SD* = 3.8913）が参加した。メンバーの構成についてはTable 1に記す。

②スタッフ：筆者はグループにディレクターとして参加し，劇の展開を行った。また，心理劇経験を有する大学院生のティーチングアシスタント（以下TAと記載）が2名，補助自我として参加した。

(2) セッションの流れ

考察の対象とする2回のソシオドラマ・セッションは，劇場面における演技への抵抗感の低減や，グループのメンバー同士の関係性の構築を目的とした数回のロールプレイ体験のセッションを重ねた後に行った。

また，2回のセッションはともに心理劇の3相に基づいて実施した。ウォーミングアップでは簡単なゲームを行った。その後，ディレクターよりテーマを伝え，2人組に分かれてロールプレイを行い，その後，その内容を全体で発表した。その中からディレクターが1つ展開を取り上げ，全体で劇化した。劇化は，ディレクターがその時のグループの状況や展開に合わせて心理劇の技法を用いて展開した。劇化においては，青年の親への気づきを促すため，青年が親との意見の違いから葛藤を抱えながらも，親に対して自分の意思を伝えることが必要となるような，自己決定のための話し合い場面を2テーマ設定した。

Ⅲ．分析方法

実施した2回のセッションの劇場面に関しては，その場での発言や態度をICレコーダーとディレクターの記録をもとに逐語データとして記述し，ディレクターの行為と参加者の行為を選出し，それぞれに分類した表を作成した。

実施した2回のセッションのシェアリングで語られた参加者の感想については，ICレコーダーで録音し，逐語データを作成した。発言のまとまりから内容のつながりや文脈を意識して解釈するため，逐語データを切片化することはせず，大きな区分ごとに語られた内容について分類することとする。KJ法に基づき，類似すると考えられる発言のまとまりを分類した。その後，岩男・古賀（2015）が親子関係に関するソシオドラマについての振り返りをKJ法を用いて分類した2個の大カテゴリー，10個の中カテゴリー，5個の小カテゴリーに基づいて命名した。その際，岩男ら（2015）のカテゴリーに当てはまらないと判断された発言については，類似する項目を集め，新たにカテゴリー名を命名した。分析結果の妥当性のため，臨床心理学を専攻し，心理劇経験を有する大学院生2名および調査者の計3名で検討を行った。

Ⅳ．結　　果

(1) 劇場面の様子

劇場面での参加者及びディレクターの様子を，ディレクターが行った劇の展開に対し，参加者がどのような反

Table 1
メンバーの構成

	性別	学年	心理劇経験の有無	WU①	WU②	WU③	WU④	#1	#2
A氏	女性	聴講生	無し	○	○	○	○	○	○
B氏	女性	4年	無し	○	○	○	○	○	○
C氏	女性	4年	有り	○	○	○	○	×	○
D氏	男性	3年	無し	○	○	○	○	○	○
E氏	女性	3年	無し	○	○	○	○	○	○
F氏	女性	2年	無し	×	○	○	×	○	○
G氏	男性	2年	無し	○	○	○	○	○	○
H氏	女性	2年	無し	○	○	×	○	○	○

※セッションの参加状況を○×で記載

応を示したかを明確にするため，2回のセッションをそれぞれディレクターの行為と参加者の行為とに分けて表に示した。セッションAは「高校生の進路相談の場面」を劇化した（Table 2）。一方，セッションBでは「小学生の習い事をやめる相談の場面」を劇化した（Table 3）。セッションA，セッションBの両方で子ども役割と母親役割の演者を交換する心理劇の技法のひとつであるロールリバーサルを導入し，劇を展開した。セッションAにおいてTable 2の傍線部（1）『「国立文系じゃなくて私立文系に進路を変えたいと思っている」』とTable 2の傍線部（3）『「やりたいことがあるから私立文系の大学に行きたい。担任の先生も薦めてくれた」と具体的に希望を説明』を比較するとロールリバーサル後にA氏の両親への説明が具体的になっていることや，セッションBにおいてTable 3の傍線部（4）『手をいじりながらうつむき加減で「ピアノをやめたいんよね」「4年生のときから楽しくなくて，でも自分で始めるっていたし，言い出しにくくて。……もう苦しくなってきたからやめたいなって」と話してうつむいた』とTable 3の傍線部（6）『顔を上げてはっきりとやめたい理由を話した』を比較してロールリバーサル後にF氏の両親に話しかける態度が変化していることから，セッションAとBの両方で，ロールリバーサルの導入前と導入後で子ども役割の演者の親に対する声掛けの仕方や態度が変化したことが示された。

さらに，セッションAでのみ，子ども役割の演者であるA氏が親に賛同されることに対する不安感を感じているようにディレクターに感じられたため，反対する母親と対峙する場面も実施した。賛同する母親との対峙場面と反対する母親との対峙場面とで，子ども役割の演者の様子や感想が異なっていた。

また，Table 2の傍線部（2）『すぐにA氏の私立文系の大学に行きたいという相談を受け入れ，「自分で決めたことなら応援する」』とTable 3の傍線部（5）『「今やってる曲だけは弾ききって終わって欲しい。お母さんは？」と母親役割のTAを窺った』を比較すると，ディレクターから親役割のあり方についての教示がないにも関わらず，子ども役割の年齢に合わせ，親役割の子ども役割に対する声掛けの仕方や態度が大きく異なることも示された。

(2) シェアリングの分析結果

シェアリングで語られた内容について逐語データをもとに分類したところ，岩男ら（2015）と一致するカテゴリーが6個，新たなカテゴリーが5個得られた。セッションAのシェアリングをTable 4，セッションBのシェアリングをTable 5に示した。セッションAの気づきの発言数は16個，セッションBの気づきの発言数は13個であった。岩男（2015）と一致するカテゴリーとしては，「親役割の大変さ」，「親の気持ちへの気づき」，「自分の親への気づき」，「自己への気づき」，「新しい家族観の発見」，「過去の回想」などがあった。

一方，新たに得られたカテゴリーとして，「実際の体験と劇での体験の違い」がある。これは，過去における親とのやり取りと劇における親役割とのやり取りとが異なっていたことについての語りである。また，「立場の違いによる気持ちのズレ」も今回新たに得られたカテゴリーであり，親と子という立場や，社会的に求められる役割の違いによって気持ちが異なっていることについての気づきであると言える。このカテゴリーはセッションA，Bのどちらにおいても多く語られたカテゴリーであった。「子の伝え方による親の態度の違い」も今回新たに得られたカテゴリーである。これは，A氏からのみ語られたカテゴリーではあるものの，ロールリバーサル実施後に同じ役割を演じたことによる意見の伝え方の変化について言及された語りであると言える。「子どもの立場について」というカテゴリーは，子どもが求められる役割の大変さについての気づきである。これは，児童期の習い事をやめる相談の場面においてのみ得られたカテゴリーであった。「子ども役の演者に対する感想」は，観客として感じた演者に対する感想である。

また，青年期の進路相談の場面においてのみ得られたカテゴリーとして，「過去の回想」，「自分の親への気づき」，「親の気持ちへの気づき」，「自己への気づき」があった。一方，児童期の習い事を辞める相談の場面においてのみ得られたカテゴリーとして，「子どもの立場について」，「親役割の大変さ」があった。

V．考　　察

(1) 第1のリサーチクエスチョン「児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，青年期の親子関係をテーマとしたセッションに比べ，親に対する気づきが高まるのではないか？」についての考察

青年期の親子関係をテーマとしたセッションAと児童期の親子関係をテーマとしたセッションBの気づきの発言数を比較すると，大きな数の差は見られなかったことから，「児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，青年期の親子関係をテーマとしたセッションに比べ，親に対する気づきが高まる」という第1のリサーチクエスチョンは否定されたと言える。そこで，それぞれのセッションにおける気づきの内容を比較していくこととする。

青年期の親子関係を展開したセッションAでは，児童期の親子関係を展開したセッションBでは見られなかった，「自分の親への気づき」や「親の気持ちへの気

Table 2
セッションA「高校生の進路相談の場面」の様子

	①演者の選出	②子ども役割のA氏から両親への相談の場面	③子ども役割のA氏と母親役割のD氏のロールリバーサルの導入	④A氏が再度子ども役割として相談する場面	⑤母親役割をD氏からG氏へと交代し再度A氏が両親に相談する場面	⑥子ども役割のA氏と母親役割のG氏のロールリバーサルの導入
ディレクターの行為	F氏に確認・依頼 A氏に他のメンバーの中から父親役を選ぶように伝えた ウォーミングアップ時にA氏とペアであったD氏に母親役を依頼 これまでの参加の様子を踏まえ役割演技に抵抗が少ないように感じたA氏に依頼	D氏，F氏に対しても，母親役割として，父親役割としての感想を尋ねた A氏がすぐに応援されたことに戸惑っているように感じた やり取りがひと段落したと感じ，劇を止め，A氏に子ども役割としての感想を尋ねた 「Aちゃんからお父さんお母さんに「相談があるんだけど」と言って始めてください」と手を叩いた A氏と話しながら場所を居間に設定 A氏が話しやすいようにA氏の位置と父母の位置を決定 A氏に相談の内容を確認し，「理系科目が苦手なので私立文系の大学に行きたい」という相談の内容を共有	A氏に母親役割としての感想を尋ねた 劇を止め，D氏に対し，子ども役割としての感想を尋ねた 子ども役割になったD氏にはA氏の相談を再現して欲しいこと，母親役割になったA氏には思ったように演じてほしいことを伝え，再度劇を実施 A氏に母親役とのロールリバーサルを提案	感想をA氏に尋ねた 再度役割を元に戻し，A氏が子役割，D氏が母親役割として同様に劇を展開	G氏に母親役割としての感想を尋ねた A氏に「視野を狭めてほしくないとも言われましたがいかがでしたか？」と感想を尋ねた 子ども役割がA氏，母親役割がG氏，父親役割がF氏の3人で再度劇を実施 すぐには賛成しない母親とのやり取りを体験するという意図で，ウォーミングアップの際に唯一反対する親を演じたG氏に母親役割を依頼	A氏に母親役割としての感想を尋ねた A氏には「視野が狭まるよっていうことを伝えるお母さんをしてください」と伝えた G氏とA氏に役割を交代するように伝え，再度劇を実施
参加者の行為	F氏　父親役を引き受けた A氏　父親役にF氏を選出 A氏　一瞬戸惑いの表情を浮かべたが了承	D氏，F氏「自分で決めたことについては応援しようと思った」 A氏「これが希望なんだって言うのを言えばわかってくれたのが嬉しかった」 しかし，その表情は困ったような笑み D氏（母）[2]すぐにA氏の私立文系の大学に行きたいという相談を受け入れ，「自分で決めたことなら応援する」 A氏（子）（1）「国立文系じゃなくて私立文系に進路を変えたいと思っている」 F氏（父）黙り込み，A氏に再度確認されてようやく反応 D氏（母）すぐに「なに？」と反応 A氏（子）「あの，ちょっと相談があるんですけど」	D氏（子）「あのちょっと相談があるんだけど…国立文系じゃなくて私立文系に行きたいに行きたいと思っている」 A氏（母）心配気な表情でなかなか話し出さず父親役割のF氏をちらちらと窺った F氏（父）先に気持ちを確認し，「ちゃんと考えてそれでも行きたいって言うんだったら協力する」と応援 A氏（母）「お父さんちょっと心配じゃない？」と父親役の様子を窺いながら心配するような態度 D氏　「お父さんとお母さんがそろっているところに相談するのはハードルが高いなと思った。難しい」 A氏　少し迷いながら，「子どものことを思うと応援したいっていうのと，心配っていうのがあった」	A氏　「具体的に説明するとふたりともすごく理解があって，頑張らないといけないなと思う反面すごくうれしかった」と笑顔 D氏・F氏　すぐに子どもを応援 A氏（子）[3]「やりたいことがあるから私立文系の大学に行きたい。担任の先生も薦めてくれた」と具体的に希望を説明	A氏（子）「やりたいことがあるから私立文系の大学に行きたい。担任の先生も薦めてくれた」 G氏（母）「選択肢を狭めてほしくない」と反対 A氏（子）「国文に行った方がいいってことっ？」と少し苛立ったように母親役のA氏の様子を窺った A氏　「お母さんの気持ちもわからなくないし，現実的に考えると，視野を広く持つって言うのが大事っていうのも分かるんですけど，自分でも考えたつもりで相談してるから，納得ができないというか…」 G氏　「こういう考え方もあるんだよっていうのを言った方がいいんじゃないかなって思った」	A氏　「ダメだったときに傷ついて欲しくないから，そういうのを考えて保険をかけてあげたいっていう気持ちがあった」 G氏（子）「後悔したくないって思う」 A氏（母）母親役割のA氏が「できれば視野を狭めてほしくない」

時間の経過

Table 3

セッションB「小学生習い事をやめる相談の場面」の様子

	①演者の選出	②子ども役割のA氏から両親への相談の場面	③子ども役割のF氏と母親役割のTAとのロールリバーサルの導入	④F氏が再び子ども役割として両親に相談する場面
ディレクターの行為	G氏に父親役を演じてもらえるか確認・依頼 父親役を選ぶようにF氏に伝えた ウォーミングアップ時にペアであった大学院生のTAに引き続き母親役を依頼 前回父親役として参加し，様々な気づきを語ったF氏に子役割を依頼	「Fちゃんからお父さんお母さんにお話をしてください」と教示し，手を叩いた F氏と話し合いながら座り方を決め，椅子の位置を移動 F氏に「ピアノをやめたい」という相談の内容を確認 母親役割，父親役割の気持ちを受けて，再度ディレクターはF氏に気持ちを尋ねた TAに母親役割としての感想を尋ねた F氏に子ども役割としての感想を尋ねた	ロールリバーサルを用いることとし，子ども役割のF氏と母親役割のTAとの役割を交代 感想を尋ねた	再度もとの役割に戻り，F氏が子ども役，TAが母親役となって同様の劇を実施 F氏に感想を尋ねた 演者の気持ちや様子の変化を感じ，観客に対し，感想を求めた F氏に感想を尋ねた
参加者の行為	G氏　苦笑しながらも応じた F氏　メンバーをぐるりと見回し，G氏を父親役に選出 F氏　驚いたような表情を見せたものの，了承	TA　「最初の楽しそうにしてた気持ちがまだあったはず。やめなくてもいいんじゃないかと思いました」 F氏　「辞めることに反対してなくて，ほっとしたというか，よかったと思ったんですけど，私がピアノを弾いているのをお父さんもお母さんも喜んで聞いてくれているっていうのを聞いて，ほんとにやめてもいいのかなって，また迷いができた感じです」と困ったような表情 TA（母）「お父さんもお母さんも演奏とか聞いて嬉しいなって感じてるところもある。でもそんなに負担なんだったら・・・・」 G氏（父）「5」「今やってる曲だけは弾ききって終わって欲しい。お母さんは？」と母親役割のTAを窺った F氏（子）「4」手をいじりながらうつむき加減で「ピアノをやめたいんよね」「4年生のときから楽しくなくて，でも自分で始めるっていたし，言い出しにくくて・・・・・もう苦しくなってきたからやめたいなって」と話してうつむいた F氏（子）「お父さん，お母さん…少し話が…」	F氏　「お父さんお母さんだったらわかってくれそうだなって。次の相談がしやすくなりました」と笑顔 TA（子）「ピアノをやめたいと思ってて」 F氏　「Fちゃんの立場で相談してるときはやめたいっていう気持ちがすごいあってどうやったらやめさせてくれるかなって感じだったんですけど，お母さんの立場になったらできればやめないで，楽しんで続けてほしいって思う気持ちがあって」 F氏（母）「本当にFちゃんがきついんだったら，やめてもいいと思っているんだけど，お父さんもお母さんもFちゃんがピアノを弾くのをすごく楽しく聞いていた。お母さんの本当の気持ちとしてはもうちょっと続けてほしいって思っている」	一同　拍手 F氏　過去にはピアノが嫌だと最後まで両親に言えなかったとを話し，「こんな風に相談してればよかったのかなって思った反面，多分親も私が嫌がっていたことはわかっていたと思う。でも，親の立場としては続けてたら将来役に立つってそこは目を瞑ってやらせてたのも愛情だと思った。本当はこれが理想ですけど，あのときこんな風に相談しなくて，それに対して後悔はしていない。してない自分にもびっくり」 H氏　「お父さんもお母さんも言ってる気持ちとかそうだなと思うし，子どもの辞めたいっていう気持ちも分かるし，ちゃんとお互いがお互いを受け止めたような感じがした」 B氏　「お母さんもお父さんもすごく優しくて，一言一言をすごく丁寧に受け止めているなって言うのが伝わってきました」 F氏　「お父さんお母さんがすごく考えてくれているっていうのがわかって。ずっと続けていくのがお父さんもお母さんも望んでいることだろうなって思って，でも辞めたいって気持ちもあって，ちょっと困ってしまって」 TA（母）迷いながら，「Fちゃんのピアノを聞いていて，お父さんもお母さんも嬉しいなって思っていた。お母さんたちが期待しすぎて負担になっていたなら，悪いことしたなって思う」 G氏・TA　戸惑うかのように沈黙 F氏（子）（6）顔を上げてはっきりとやめたい理由を話した

時間の経過

Table 4
青年期のロールプレイングにおけるシェアリング時の語り

	役割	発　言	カテゴリー
A 氏	演者	①えっと，今日は，私の・・・を演じていただいたんですけど，みなさんにご協力いただいて。なんか，進路選択とかがもう相当前なので，その時の気持ちとかも，なんか，どうたったかなっていうのがあったんですけど，実際にやっていると，実際のときとはお父さんとかお母さんの反応が全然違いました。	①実際の体験と劇での体験の違い
		②・・・っていうのもあったんですけど，お母さんと自分を交互にやってみたんですけど，やっぱり自分のときには，自分のきもちが先行しちゃって，お母さんになると，お母さんの立場の気持ちが先行してしまうっていうことがあって，どっちの気持ちもわかるはずなんですけど，立場がちがうと，自分の気持ちを優先しちゃうかなっていうのと，	②立場の違いによる気持ちのズレ
		③・・・でもこう，いろいろ話をしていくと，伝え方とか言い方とかで相手の反応とかも変わってくるんだなっていうのは今回思いました。	③子の伝え方による親の態度の違い
B 氏	観客	①ロールプレイを見させてもらって，なんか，進路相談の場面を見るっていうのもなかなか初めてのことだったので，なんか，それぞれの役割だったらどう思うんだろうなっていうのを私も見ながら思ってたんですけど，それぞれ，言うことがああそうだな，そうだなそうだなって思って，ああ，どうしようってすごいこんがらがってしまって。	①立場の違いによる気持ちのズレ
		②見ていてすごいそう思ったんですけど，自分がその，進路相談をしているときっていうのと，見るっていうのでまた全然違って思えるんだなっていうのを今日，観客をやってみて思いました。	②実際の体験と劇での体験の違い
D 氏	演者	①進路相談の，場面を演じるにあたって，自分が高校生の時に親に話したことを思い出して，そんときはこう，応援してくれたと言うか，すぐに受け入れてくれたので，自分がお母さん役を演じる時もやっぱりそういう風になったし，子ども役のときも，まあ多分なんだかんだ言って応援してくれるんだろうなと思いながら相談していました。	①過去の回想
		②いろんなお母さん像があっておもしろいなっていうのを思いながら，観客のときは見ていました。	②新しい家族観の発見
E 氏	観客	なんか，おかあさんが，A さんがやったのと，D さんがやったのと，G さんがやったのと，あって，人それぞれやり方が全然違うくって，なんか，やる人によってそれぞれ全然違う感じになるんだなと思って，なんかおもしろかったです。ありがとうございました。	新しい家族観の発見
F 氏	演者	①えっと今日は，二人組でやったあとに，お父さんでもやったんですけど，二人組の時に，自分がすんなり出てきた相談っていうのが，自分が高校生のときに，親に相談した事だったので，やっぱりなんか自分の経験っていのが，出てくるのかなって思ってて。	①過去の回想
		②で，みなさんの聞いていたんですけど，やさしいお父さんとお母さんばっかりで，なんか，自分の高校生の進路相談のときは，こんなにおだやかじゃないっていうか，結構もめにもめて，進路・・・ここに来たので。	②実際の体験と劇での体験の違い
		③前でお父さんやったときも，かけたい言葉は，自分が言われたかった言葉，結構そういうのが多くて，なんか，こう・・・なんか，すんなり受け止めてほしかったっていうのがあって，結構そういうタイプのお父さんを演じたり，二人組でやるときもお母さん演じたり，自分が言われたかったことっていうのを演じたんですけど，でも，なんか前でずっとお父さんやっていくにつれて，心とはうらはらに，心で思っていることが，実際自分が親に言われたこととかが多くて，ああ，親はこんな気持ちで，あんなふうに言ってたんだろうなっていうのがすごいわかって，なんか，ちょっと家帰ったら親に電話しようかなって。	③立場の違いによる気持ちのズレ⇒自分の親への気づき
G 氏	演者	①ぼくも，そうですね。結構自分の家族のことを思い出したりとか，自分のことを考えたりとかしたんですけど，僕の場合はそうですね，結局，県外はダメって言われて，受けれなかったんですよ。	①過去の回想
		②で，なんかそういうこともあってからか，自分がされたかったことをほんとは，だから子供の意見を受け止めるとか，お金とか家のこととか考え無しに，ほんとは手放しに，信頼して送ってあげたいのに，なんか，劇になると，それを認めない自分もいて，親の気持ちがわかったわけではないんですけど，やっぱ，どっか似たようなところがあるのかなとか思って。	②立場の違いによる気持ちのズレ⇒自分の親への気づき
		③あとは，ちょっと，なんか，一回母親を演じたあとに，針塚さん役をやらせてもらって，針塚さんが，僕が言ったことを僕に向けて言ってくださったときに，なんかすごい，自分が言ったことに自分でどう反論するかっていうのを考えて，なんか，いつもは全然，こういう風には考えないから，なんかもうちょっとこう，人がどう思うのかとか，自分の意見とかどういう風に見られてるのかとかをもっと考えないと，なんか，ちょっと，そうですね，なんか，考えさせられたというか，人の気持ちあんまりわかってなかったし，いまいち見えてなかったなっていうのがわかったし，なんか，ちょっといろいろと考えさせられたなと。反省もこめて。	③自己への気づき
H 氏	観客	①見ているときに，A ちゃんが言ってることもお父さんお母さんが言ってることも確かになー確かになーって思って。	①立場の違いによる気持ちのズレ
		②・・・自分がその，高校生だったときはなんか，親とか先生とか，なんでわかってくれんのやみたいなところがあったんですけど，それぞれちゃんと，思いがあって，言ってるんだなっていうのが，ふと思いました。	②親の気持ちへの気づき

Table 5
児童期のロールプレイングにおけるシェアリング時の語り

	役割	発　言	カテゴリー
A 氏	観客	①なんか，今回３回同じ場面をされたのを見て，なんか３回で両親の反応がともに違ったと思うんですけど，それは伝え方が結構違ったのかなとすごく思っていて，特に２回目の時は，結構子どもの方が結構遠慮して，気持ちを素直に言わずに，嫌なの我慢してたとか言わずに，結構遠慮してたから，お父さんお母さんも，結構続けてみたらっていう風に強く言われてたと思うんですけど，子どもが結構今までどうだったかっていうのを細かく素直に伝えると，親も受け止めてくれるというか，そういうのが結構違うんだなって思ったのと。	①子の伝え方による親の態度の違い
		②なんか結構，F さんが結構素直に伝えるのがうまかったので，実際にそうだったのかなと思ったんですけど，実際はそうではなくて，伝えられなかったっていうのをお聞きして，すごくびっくりしたんですけど，それでも，今やってみて，その今までのことを後悔せずによかったなっていうのをおっしゃってたのがとてもよかったなと思いました。	②子ども役の演者に対する感想
B 氏	観客	①今日は習い事の相談っていうことだったんですけど習い事って学校の勉強とかと違って，その，その家族家族で，その習い事に対する親の重いとかこの思いとかもそれぞれなので，うーん・・・・なんか色んな事情もあると思うので，親をやった時難しいと思ったし，子をやった時も難しいと思ったんですけど，少しでも設定が違えば，全然違う対応をするのかなとも思いました。	①さまざまな家族像について
		②でもそうですね，今の小さな子たちを見てると，習い事で悩んでる子とかもいると思うので，その子たちのこともちょっと考えたりしました。	②親役割の大変さ
C 氏	観客	その，劇とか見てたりして，親が，子どもの将来を思って続けてほしいっていう気持ちとか，それもわかるし，あと，それであとまあ，ほんとに子どもがそうやって楽しそうにやってくれてるのを楽しいって思ってるっていうのも本当なんだな，あるっていうのもわかりますし，子どもが，辞めたいっていう気持ちと，親に喜んでもらいたいっていう気持ちがあるのもあって，なんかそこをうまく一番いい方法に持ってくのがすごく難しいことなんだなっていう風に，なんか人を育てることってすごく難しいことなんだなっていう風に，思いました。	立場の違いによる気持ちのズレ⇒親役割の大変さ
D 氏	観客	①小学校のときの習い事っていうのが特別だったりするのかなっと思って，習い事を始めるきっかけっていうのが，自分からとかじゃなくて，親から勧められたっていうのも結構小学校ならあるかなって思うんですけど，そこでそんなかで，やっぱ自分が辞めたいっていうのって結構勇気いることだなって思って。	①子どもの立場について
		②結構親からしても，何て言ってあげたらいいのか分からなかったっていうのが正直な感想なので，だいぶ難しかったです。	②親役割の大変さ
E 氏	観客	何か私はピアノ辞めたくないって言ったんですけど，ピアノ辞めたいって言われて，ちょっと寂しかったんですけど，うーん・・・でも，なんか最初なんか見てても家庭環境すごい違うんだなっていうのと，・・・うーん・・それくらいです。	新しい家族観の発見
F 氏	演者	①えっと，今回は，小学生のときの習いごとっていうのが心理劇のテーマだったんですけど，小学生の，小さい時の習い事って，将来役に立つとか，未来・・・これがどういう風に自分のスキルになっていくのかっていうのが，子どもはまだ理解・・・・子どもはまだわかんないから，習い事を続けていくかっていうのの判断基準が楽しいか楽しくないかになるので，なんか，でもそれを見てる，親はわかるじゃないですか。この習い事は絶対続けておいた方がいいって。楽しくなくても続けてたら，後で絶対続けててよかったって思う時が来るって。そこの理解の違いがあるのかなって思って，子どもと親は。だから，それを子どもに伝えるのも難しいし，うまく伝えられたとしても，それで子どもが楽しくなくてそれを続けていくのっていうのは結構きついと思うんで，なんか難しい問題だなと思ってやってました。	①立場の違いによる気持ちのズレ⇒親役割の大変さ
		②で，今回，こういう，みなさんが見てる場になると，結構マイルドにしちゃうっていうかいい感じにしちゃうんですけど，今回も，優等生のお父さんと優等生のお母さんと優等生の子どもみたいな感じになっちゃうんですけど，それでもやっぱ思うところはあったりとか，自分の経験を思い返して色々考えられたりとかするので，なんか，そのあたりがすごい興味深いなと思いながら演じてました。	②実際の体験と劇での体験の違い
G 氏	演者	なんか，そうですね，えっと，ピアノとかプールとかサッカーとか，学校の，国語算数理科社会英語みたいなやつじゃない音楽とか体育みたいな習い事って，なんか，親の目線からみたら，全部楽しそうというか，なんか否定しずらいというか，って思っちゃうんですけど，子どもからしたら学校とか勉強とかと変わんなくて，やらされてるものだし，楽しくないとか思ってる子もいて，楽しいって思ってる子もいれば，楽しくないって思ってる子もいて，それは勉強と一緒で，それはなんか，塾っていう話を聞いたときに思って，確かに今の話がもしピアノじゃなくて塾だったら，僕はやめていいよって言ったかなとか考えて，なんか，そうですね，子どもの気持ちになって考えるっていうのはなかなか難しいっていうか，親にもなったことないのにこういうこと考えるくらいだから，きっと親になったらもっとこういう気持ち大きいんだなと思って，やっぱなんかこう，難しいですね。	立場の違いによる気持ちのズレ⇒親役割の大変さ
H 氏	観客	①なんか自分が小学校のときにおとうさんとお母さんにやめたいって相談したことがなかったのですごい緊張しました。	①実際の体験と劇での体験の違い
		②最初に塾辞めたいって言われたときに，塾辞めたい気持ちもわかるし，けど親としては行ってほしいっていうのがあったりして将来自分は親になれるのかなとか思いました。	②立場の違いによる気持ちのズレ

づき」,「過去の回想」」などのカテゴリーが見られた。このことから，青年期である参加者は，架空の親子関係であるとはいえ，今の自分と近い年齢の子どもがいる親子関係を演じることや観ることを通して，過去の自分や，自分と親との関係を振り返ることとなったと考えらえる。

一方，児童期の親子関係を展開したセッションBでは，セッションAでは見られなかった,「親役割の大変さ」や「子どもの立場について」というカテゴリーが見られた。児童期の子どもがいる親子関係は，青年期である参加者にとっては，過去の関係であり，やや距離のある関係であったと考えられる。この距離のある関係を演じ，観るにあたって，参加者は過去の関係を回想するというよりもむしろ，冷静に親役割のあり方やその立場の難しさについて考えることができたと推察する。岩男（2015）では，幼い子どもを演じることによって親の対する気づきが高まる可能性を示唆していたが，今回の研究では，子ども役割の年齢の違いによって，過去の自分の体験を回想し，捉え直すのか，親子関係を客観視し親役割の大変さに気づくのかといったように，気づきの側面が大きく異なっていると言える。すなわち，今後支援においてテーマ設定をするにあたっても，その目的によって子どもの年齢設定を変える必要があると考えられる。

(2) 第2のリサーチクエスチョン「児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，親が子を守るような関係が行為化され，青年期のセッションでは親が子を信頼するような関係が行為化されるのではないか？」についての考察

親子関係の年代の設定の違いによって，劇場面で行為化された親子関係のあり方が異なっていた。これは，親子関係のあり方が子どもの発達によって変化すること（落合・佐藤，1996；小高，2000）が関係していると言える。

セッションAの青年期の親子関係を取り扱った際には，はじめ親役割が子ども役割を応援するという展開が見られた。青年期は，親は子を信頼し，一人の人間として対等に関わるようになる時期（落合・佐藤，1996）である。そのため，ソシオドラマのなかでも，親が一方的に子を諭すような関係ではなく，青年と親とが対等に対話するなかで進路や将来について話し，子の自己決定を認めるような親の関わりが展開されたと考えられる。一方で，児童期は親が子を抱え込み，守るような関係の時期（落合・佐藤，1996）である。そのため，ソシオドラマ・セッションにおいても親役割は子の意見に反対し，子を説得するような関わりになったと推察する。これらから，第2のリサーチクエスチョンである，児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，親が子を守るような関係が行為化され，青年期のセッションでは親が子を信頼するような関係が行為化される」は正しいと考えられる。

心理劇においては，内的世界が行為化を通して表現される（Kellerman, 1992；Blatner, 1973）とされるため，劇の中で演じられる親役割の子役割への関わりのあり方の違いには，青年が認知する，子の年代による親子関係をどのように認識しているのかが関係していると考えられる。メンバーの感想からは，意識的，無意識的の違いはあれど，自分の親子関係を振り返り，自分の親をモデルとしたり，逆に反面教師としたりして，親役割を演じていたことが語られていた。このことからも，これまでの親の自分に対する態度の認識が年代によって異なることが，劇中で行為化された親子関係像の違いに影響していたと考えられる。このような行為化された親子関係像の違いが，前述の気づきのあり方の違いにも関連していると推察される。

(3) 第3のリサーチクエスチョン「個人の内面を外在化しないソシオドラマにおいても，個人の内面についての理解が得られるのではないか？」についての考察

第3のリサーチクエスチョンは「個人の内面を外在化しないソシオドラマにおいても，個人のテーマについての理解が得られる」であった。このことについては，セッションAの青年期の親子関係をテーマとしたソシオドラマにおいて，自分の親が過去に自分に向けていた気持ちについての気づきが語られていたことから一部正しかったと考えられる。セッションBの児童期の親子関係をテーマとした場合には，個人のテーマというよりもむしろ普遍的な人間関係のテーマとしての親子関係についての気づきが多く語られたことから，子ども役割の年代設定により異なると言える。しかし，大島（2014）が，青年は自分の親との関係をどのように認知しているかを認識し，親との関係に一区切りをつけることが重要であり，一区切りをつけることによって，青年のなかに新しい親像を形作っていくと述べていることを踏まえると，今回実施した2つのセッションは，青年期の親子関係をテーマとしたセッションにおいて自分の親との関係を再認識し，児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいて新たな親像について考えることになったと言え，青年期にとって重要となる親子関係についての理解の2側面に対するアプローチとなっていたと考えられる。

(4) 発展的な考察

今回考察の対象とした2セッションの両方で,「立場

による気持ちのズレ」というカテゴリーが多くの参加者から語られた。参加者は，ロールリバーサルを用いて親と子両方の役割を演じたり，それぞれが立場を入れ替えながら気持ちを語っていく様子を観劇したりするなかで，親と子それぞれの立場の気持ちの違いや，社会的な知識と経験を豊富に持つがゆえの親の立場の難しさに気づいていったと考えられる。さらに，こうした立場による気持ちの違いや親の立場の難しさに気づいたうえで，「親は，（習い事を）続けていてよかったって思う時がくるって分かる。それを子どもに伝えるのも難しいし，それで子どもが無理して続けるのを見るのも結構きついと思うので，難しい問題」という語りも得られた。現実の親子のやり取りのなかでは子は親の複雑な心理プロセスに気づくことが無いために，親に反発したり，負の感情を抱いてしまったりするという，親子間の行き違いによって葛藤が生じてしまうという気づきであると言える。この気づきは，過去の自分と親とのやり取りでは気づき得なかったことではないだろうか。

このように，参加者はソシオドラマという半現実の場で実際に親の立場を疑似体験することで，現実に自分の親と対峙した場面では気づくことができなかったことについての洞察を得たことが今回の2回のセッションを通して示された。大島（2015）は親に対するイメージを変化させるきっかけとして，親の視点に立って考えることの重要性を指摘している。このことを踏まえると，ソシオドラマの場においては頭の中で思考するのみならず，実際に親役割を演じ，親の立場として子どもと対峙することによって，青年が自分自身の体験に基づいて，親との関係を新たな視点でとらえ直すことにつながると考えられる。大島（2014）は，青年の親に対するイメージを統合し，青年の中で親との関係に一つの区切りをつけることが青年が新しい親像を形作るために重要であると述べているが，ソシオドラマでの体験はその一助になると考えられる。

Ⅵ．まとめ

本研究では3つのリサーチクエスチョンを立て，考察を進めた。リサーチクエスチョンのうち，2つは支持されたと言えるが，第1のリサーチクエスチョンであった「児童期の親子関係をテーマとしたセッションにおいては，青年期の親子関係をテーマとしたセッションに比べ，親に対する気づきが高まる」については，むしろそれぞれのセッションにおいて気づきのあり方が違うということが示された。これらから，「青年期の子どものいる親子関係では，自分の親子関係を振り返るような気づきが語られ，児童期の子どものいる親子関係では，親の役割のような一般的な親子関係のあり方についての気づきが多く語られる」という新たなリサーチクエスチョンが得られた。このことについては，一つは青年にとって青年期の親子関係はより身近であり，子ども役に自分を重ね合わせ，目の前で行為化される親子関係に自分の親子関係を重ね合わせることになったと考えられる。もう一つは，児童期の親子関係については，実年齢との差が大きかったことに加え，大学生という，次の親となる準備期間とも言える時期であるからこそ，親の立場に立って子への関わりを考えることになったと考えられる。このように，子の年代の違いによって，青年の気づきの内容は異なっていたため，目的に応じてテーマ設定を考える必要があると言える。

しかしながら，今回取り扱ったのは一つのグループの2セッションのみであるため，今後対象となるグループを増やしさらなる検証をしていくことも必要であると考える。

引 用 文 献

Blatner, H. A.（1973）．Acting―In：Practical Applications of Psychodramatic Methods. New York, Springer. 松村康平（監訳）（1987），アクティング―イン：心理劇の実践的活用，関係学研究所

Cummings, E. M., Davies & Campbell, S. B.（2006）．Developmental Psychopathlogy and family process: Theory, research, and clinical implications., The Guilford Press. 菅原ますみ（監訳）（2006）　発達精神病理学―子どもの精神病理の発達と家族関係，ミネルヴァ書房 .

古川　卓・中山公彦（2015）．親子ソシオドラマと大学生―役割交換教材「お小遣い値上げ交渉」の試行から―，第20回日本心理劇学会第40回日本心理劇学会合同福岡大会研究発表抄録集 .

針塚　進（2003）．心理劇における個人と集団による体験的現実性，心理劇，第8巻，第1号，9-12.

岩男尚美・古賀　聡（2014）．ソシオドラマにおける役割交換法が大学生の親子関係認知に与える影響，心理劇研究，第38巻，15-27.

岩男尚美・古賀　聡（2015）．大学生を対象としたソシオドラマにおけるピアレビュー・セッションの意味，心理劇研究，第39巻　39-50.

J. L. Moreno（1946）. Psucodorama First Volume Beacon House, Beacon, N.Y.　増野肇（監訳）（2006），サイコドラマ―集団精神療法とアクションメソッドの原点，白揚社 .

J. L. Moreno（1964）. PSYCHODRAMA Volume Beacon House Inc.

川瀬隆千（2010）．大学生の親準備性に関する研究，宮崎公立大学人文学部紀要，第17巻，　第1号，29-40.

Kellermann, P. F.(1992). Focus on Psychodrama; The Therapeutic Aspects of Psychodrama, 増野　肇・増野信子(訳)(1998)：精神療法としてのサイコドラマ　金剛出版 .

小高　恵(2000). 親―青年関係尺度の作成の試み，南大阪大学紀要，第 3 巻，第 1 号，87-96.

増野　肇(1997). 心理劇とその世界，金剛出版 .

増野　肇(2006). ソシオドラマ，高良　聖(編集)(2006)：現代のエスプリ　サイコドラマの現在　至文堂 .

落合良行・佐藤有耕(1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析，教育心学研究，第 44 巻，11-22.

大島聖美(2014). 青年の親に対する認知の重要性　青年期の親子関係研究及び親準備教育の観点から，広島国際大学心理化学部紀要，第 2 巻，第 1 号，69-78.

大島聖美(2015). 若者の親に対するイメージの発達過程，家族心理学研究，第 29 巻，第 1 号，34-50.

島　義弘(2014). 親の養育態度の認知は社会的適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果，発達心理学研究，第 25 巻，260-267.

Steinberg, L(2008). Adolescence(8th Ed) Berkshire; McGraw Hill.

高良　聖(2013). サイコドラマの技法，岩崎学術出版社 .